

音楽のよろこび No.66

2025年 6月23日
発行文責 担当事務局
田中正恭 田村乃里子

いよいよ梅雨に入りました。むしむしする日が続いています。皆さま体調はいかがでしょう。

さて、前回「トランペット」稲垣路子さん、新穂優子さんの二本のトランペットと、大山宮和瑚さんのピアノをお聴きいただきました。皆さまの感想をアンケートで読ませていただくと、クラシックトランペットのすばらしさ、2人の仲の良さ、温かいトランペットの響き、華やかさと同時に哀愁を感じる、3人のアンサンブルでの信頼関係等々、素晴らしい演奏に満足された方が多かったようです。

最前列の方は大きな音にびっくりされたのではないのでしょうか。トランペットのイメージが、ジャズだったりファンファーレだった方が、クラシックトランペットの良さを感じていただけたようで、とても嬉しく思いました。

また、トランペットにまつわるエピソードも、胸にこみ上げたりもした時間でもあったようです。



ちょっと、リハーサルの様子を、、、大山さんのピアノはトランペットとやることが多いそうですが、音量に気を使っていらっしゃるようでした。そのような大山さんのことを、トランペットのお二人は、「しっかりサポートしていただいて…」と言っておられました。また「トーク」も練習されていました。講座を「つくる」誠実な取り組みが事前準備として行われ、あの豊かな時間となっている事に、感謝したいと思います。

さて、本日は「チェロ」。この講座のはじまりの時に、京響の渡邊正和さんが本大学校の「入学式」でチェロとチェロ音楽の歴史、チェリストのパブロカザルスについて、熱を込めて語られたことが記憶にあります。

今日は、一樂 恒（イチラク ヒコ）さん。チェロ四重奏です。楽しみでしかありません。
芝内 あかね（シバウチ アカネ）さん、孫工 恵嗣（マコト クレイシ）さん、松蔭 ひかり（マツカゲ ヒカリ）さん
よろしくお願いいたします。

次回は8月25日(月) 第4週です
会場：鴨沂会館
13:00開場 13:30～15:30

サマーコンサート
金管楽器のアンサンブルです お楽しみに



～アンケートから～

いつもアンケートにご協力
ありがとうございます。
アンケートは一部抜粋したものと
あります。ご了承ください。

すばらしい演奏ありがとうございました。昔々中1の時、ある子から「ブラバンに入ってトランペット吹いて」と言われ、音楽室に行ったら、全員女子だったのを懐かしく思い出しました。茂木さんの本は全て読んでいたので、それも懐かしかったです。（チェロ初心者）

トランペット基礎練習と紹介されたモーツァルトの魔法の鈴、とてもかわいい編曲で心に残りました。2つのトランペットでピタッと息を合わせるといのは、絶妙の技だと思いました。女性奏者としての話、マーラーの3番の話などが聞けて良かったです。（東村さま）

トランペットの曲というのは、今回の講座ではじめて聴いたのではないかと思います。かん高い音を出す楽器というイメージしかなかったのですが、とても心地よかったです。土曜日のセレナーデはおしゃれでロマンチックで、とても素敵でした。

トランペットはニニロッソの「夜空のトランペット」しか知りませんでした。しかし今日の曲も良かったです。もの静かな中にひたれて気持ちよかったです。ジャズのトランペットもいいですが、今日のはよかった。（鶴谷 美佐保さま）

すてきな演奏をありがとうございました。「マリエッタの歌」は、やさしい音色でトランペットの音色の多彩な面を聴かせていただきました。（S.Tさま）

本日トランペットの演奏を堪能することができました。ありがとうございます。若い頃はジャズやロック音楽が好きで、トランペットは迫力ある楽器との印象でしたが、本日は2本のトランペットが織りなす独特の哀愁を味わうことができました。特にボロヴィツの曲は、これまでのトランペットのイメージを変えてくれました。（荒井さま）

二人の仲の良さが現れる楽しい教室でした。（講話・演奏）

トランペットの新穂さん。現在「大阪市音」に在籍されているとのこと、小生も以前「大阪市音」の会員になっており、「大阪市音」の演奏会にはよく行ってました。ただ、一時運営が非常に困難な状況になり、団員の皆さんはご苦労されたとのこと。新穂さん、ご活躍されている様子。今後も頑張ってください。（C.Sさま）

「音楽のよろこび」今回もとても熱のこもった誌面で、田中さんの学びの深さに尊敬です。今日は正に管楽器は「歌う」そのものだと感じ入りました。「マリエッタの歌」のような愛の歌も、「ファンタンゴ」のようなカッコイイ情熱的なうた。「古典的なコンチェルティーノ」の中での歯切れのよいリズムカルな歌、重厚な響き、トランペットの様々な音色や輝きを味わわせてもらいました。また、お二人のソロは、選曲といい、お人柄を表わしてすてきでした。デュエットもアンサンブルも、お三人のかけ合いがあたたくていいですね。3種のトランペットを紹介いただき、ありがとうございました。（T.Kさま）

哀愁を感じるトランペットの音色がいいと思いました。演奏家になられるまでの回想の話にすごく興味を持ちました。できれば、各楽器の音の鳴らし方のような話を伺えたら嬉しいです。

知らない曲ばかりでしたが、楽しそうに話され、演奏されていました。女性トランペッターとして活躍をお祈りします。ありがとうございました。

トランペットといえば、ジャズのサッチモを思い浮かべてしまいがちですが、クラシックとしてのトランペットのデュオ曲、初めて聴くことができ、貴重な時間でした。コンチェルティーノの1楽章はバッハのフーガを取り入れていてとても興味深かったです。土曜日のセレナーデは、とても美しい曲で癒されました。大山さんのピアノもすてきでした。（Kさま）

フリューゲルホルンの太くて柔らかい音が素敵でした。「マリエッタの歌」で泣かせてもらいました。アーバンの練習曲は、久しぶりに聴けて嬉しかったです。いい曲だったんですね。トランペットの輝かしいだけでなく柔らかい二重奏が心地よかったです。お二人の今後の益々のご活躍を祈っています。頑張ってくださいね。（布川博さま）

本日は前から2列目左端近く、ピアノ演奏者の後横から右手がよく見え、トランペットは真横からみられる位置。トランペット奏者のほほの筋肉をどの様に使うのかと思い、唇とほほを眺めていました。ラテンによく合うタンゴの曲に、体と足がリズムよく動く感じで聞き惚れていました。トランペットのデュエットも何か呼び合うような二人の演奏にうっとりする至福の時でした。トランペットはかん高い音色とと思ってましたが、ピアノ演奏の乾いた音色にトランペットのしっとりした音色があいまって、胸のあたりに響く気持ちのいい曲を聴かせていただきました。

トランペットのアンサンブルは初めて聴きました。入口のやわらかい音楽にはじまり、へえ〜と驚きました。お二人の楽しいアンサンブルも明快な、でもいろんな世界へ連れて行ってもらい、新鮮な充実した時間を過ごせました。ピアノの生き生きしたすばらしい音楽と絶妙なからみあい、すてきでした。(RYさま)

今回はお二人の仲の良さが表れている講座でした。華やかさが目立つトランペットの音色だけでなく、哀愁あふれる音色が素敵でした。初心者なので、曲に入る前にトランペットのお話をして頂きたかったです。

ファンタンゴの心臓のような鼓動のタンゴのリズムが、トランペットとピアノで冒頭につよい印象でした。切なで強い。トランペット奏者になる成長物語も聞かせていただき、いつも楽器と共に過ごされてきたのだなと思いました。上達するためには他の演奏との合奏がたいせつなのですね。切磋琢磨されてこられたのだなと思いました。ボリュームがあまりに大きくて、トランペットの音の馬力に打ちのめされてしまっていました。最前列に後悔。指の動きはよく見えて、両奏者を見比べて楽しんでいました。「土曜日のセレナーデ」はニューヨークの哀愁としゃれた響きがありとても好きでした。ピアノ演奏もとても技術が高く、トランペットによく合っていました。ありがとうございました。(外村律子さま)



今回の講義に際して座席を全体的に後方へ移動して設置されたのか、よくわかりました。トランペットの迫力とピアノのアンサンブルが素敵でした。またピアノをバックにしてお二人のトランペットが会話をしているようで、ハーモニーも素晴らしく哀愁のある音色や明るくて晴れやかな音色も楽しめ「ブラボー!!!」でした。

日頃、京響で活躍されている演奏家の演奏を間近に聴け、更に担当楽器や、曲目、作曲家、そしてご自身のお話も聞かせていただき、素晴らしい「大人の音楽教室」になっていると思います。

今後、ベートーベンやシューベルト、バッハ、ハイドン等々「クラシック音楽作曲家特集」などの企画もご検討いただければ幸いです。

金管楽器の主役であるトランペットの力強い華やかな音色を、たっぷり楽しむことができました。熱演ありがとうございました。

稲垣さんの音、安心します。
新穂さんの音、力強いですね。
一曲目コーラスのように言葉が聞こえるようでした。
オープニング、驚きました。

魅惑的なタンゴのリズムから始まり、トランペットの音色に引き込まれ、オペラ「死の都」よりマリエッタの歌でさらに奥へ連れていかれた感じでした。小さな頃から好きだったトランペットの音を、近くでたっぷり聴くことができて幸せな時間でした。稲垣さんと新穂さんの仲の良さがわかる笑い声！若いっていいなー！そんな二人の音を支えていた大山さんのピアノの音もとても素敵でした。伴奏ピアノとは！の思いも知れました。(JAさま)

♪ 音楽に関する「ことば」
「詩」「文学的成句」

M.ロストロポーヴィチ、ガリーナ
ヴィシネフスカヤ 著
「ロシア・音楽・自由」から
1987 みすず書房

《各号スペースがあれば、
田中の独断でいいな〜と
思った「ことば」や
「詩」・文学的成句など
を書いていきます。》

ロストロポーヴィチとヴィシネフスカヤは、
＜プラハの春＞音楽祭で出会い、チェリストと
ボリショイ劇場の女王の運命的な愛の物語のは
じまりでした。その後二人は、芸術生活のみな
らず、あらゆる歓びと苦悩をなかならず政治的
な異議申し立ての危険もことごとく、分かち合
うのです。

「音楽家の技術は、詩人の言葉と同じことですよ。言葉は、だれでも知っているけども、詩人とそうでない者と
がいる。百万人について1人の詩人がね……。なるほど音楽家はだれでも技術を学ばなくてはならないけど、解
釈、演奏家になるのは、1万人に1人でしょうね……」P.36

「この機会を逃さずに、パブロカザルスと話したい。私の父はカザルスから何回か教えを受けたことがあり
(私は父から教えを受けたから) 私はチェロにおける彼の孫弟子と自認してもよいでしょう。
パリのコンクールで出会った日は、私の最良の日でした。私にとってチェロの分野で並ぶものがないお手
本であったばかりでなく、祖国(ロシア)への愛着を捨てず、自国民を愛し、ともに苦しんだ人間の模範
でもありました。

■Mstislav Rostropovich (ムスティスラフ ロストロポーヴィチ 1927～2007)

アゼルバイジャンのバクー生まれ、モスクワ音楽院で学び、1950年代以降、欧米各国で演奏…
カザルスに絶賛され、若くして世界的名声を得た。

しかし、1970年、作家ソルジェニーツィンを擁護し、当局と対立1974年出国。78年ソ連の市民権を剥
奪された。しかし、音楽活動を精力的に続けた、1958年には初来日。

この本の190～191ページには、カザルスが彼の為にパリのホテルの一室で、バッハの組曲を一曲弾いて
くれたことを、「聴き手の心を把まえきり、これ以外の演奏はありえない」という気持ちにさせてしまう、
カザルスの確信に満ちた芸術家の姿を伝えています。

そして、レコードではそうはいかないこと。とりわけ演奏が極限状態に達した時などは、芸術家の人柄と存
在感がなによりも大きな役割を演じると…語っています。

私達がよく言う「やっぱり、生演奏に優るものはないねえー」に通じるような発言かなとも思います
が……。 (田中記)